

「清浄」の意味について

——ウパニシャッドから初期如来蔵系經典まで——

藤 田 正 浩

はじめに

本稿で「清浄」という語を採り上げる動機は、自性清浄心思想を意識してのことである。自性清浄心の「清浄」の意味は、筆者自身もすでに考察したことがあり、⁽¹⁾ わざわざ論ずる必要がないほど明らかであると思われる。しかし、本稿ではさらに、なぜ自性清浄心の「清浄」に特定の語が選ばれたか、という問題も含め、「清浄」に相当するサンスクリット語を広く集めて、それらの意味の違いを検討してみたいと思う。その範囲は、パーリのニカーヤが主たる文献であるが、その前に所謂古ウパニシャッド、とりわけ釈尊以前の成立と考えられている初期のものを考察し、部派仏教、初期大乘仏教及び初期如来蔵系經典からも若干のものをつけ加えたい。

本稿では、自性清浄心の「清浄」のみならず、何らかの形で清浄という意味を含んでいる語全般を扱いたいのであるが、かなり絞らざるを得ず、またその取捨に関しても客観性があるとは言えない。まずこの点をお断りしておく。最初に、本稿で採り上げる語をサンスクリット語の語根に直したうえで、列挙しておく。

√kr (pari-), √dā (ava-, pary-ava-, vy-ava), √pū, √bhās, √śuc, √śudh, √śubh, √śad (pra-, vi-pra-, san-pra-)

このなかには、特定の前接辞とのみ結びつくものもあるので、それらについてはその前接辞を括弧の中に示しておいた。その他のものについては、√śudh のように、前接辞の有無に関係なく多用されるものも含めて、その派生形とともに、後にそれぞれ具体的に検討するつもりである。peśāla⁽²⁾ (√pis), kaipa⁽⁶⁾ (√kip), √kliś (汚す)・√lip (塗る) 及びその派生語などの否定形、√mij (拭う、磨く)・√dhāv (洗う)・√śna (沐浴する) 及びその派生語など、accha⁽⁴⁾, śita⁽⁵⁾, vimala⁽⁶⁾ (離垢)・パーリ文に見られる payata (pra-vyam) なども勿論「清浄」ではあるが、直接自性清浄心と関係しないと判断したため、今回の考察からは除外した。

一、ウパニシャッド文献

ウパニシャッドと原始仏教の関係について断定的なことは言えない。しかし、換骨奪胎しているとはいえ、ウパニシャッドの術語を仏教が採用していることは間違いないであろうし、思想内容に関しても影響を受けていると見てよいと考えられる。したがって、古ウパニシャッド十四篇のなかでも、できる限り成立の古いものを採り上げたい。散文で書かれている『ブリハッド・アーラニヤカ』と『チャーンドーギヤ』の二篇が最古であることはほぼ学界の定説となっている。⁽⁷⁾ 一方、『マーンドゥークーギヤ』と『マイトリ(マイトラーヤナ)』の二篇は最新(紀元前後より以降)であるため、最初の二篇を中心に残りの十篇を範囲とする。

最初に『チャーンドーギヤ』では、第五章と第七章に、'suddha', 'suddhi' が見られる。五・一〇・一〇の例は次の通りである。

「ブラヴァーハナ・ジャイヴァリ王は、シュヴェータケートゥ・アールネーヤに次のように語った。」

「しかし、およそ、このようにこれらの五つの祭火を知るものは、たとえ彼ら「盗むものたち」と交際しても罪に汚されることはない (na...lipyate)。およそこのように知るものは、誰もが、清浄 (suddha)、澄浄 (puta) となり、福德の世界に属するものとなるのである」と。⁽⁸⁾

七・二六・二は次の通りである。

食物の清浄の中に (ahara-suddhan)、心身の清浄 (sattva-suddhi) があり、心身の清浄の中に堅固な記憶がある。記憶を獲得するときにすべての結縛が解ける。穢濁を打ち砕いた (mridita-kasaya) 彼(ナラダ)に、尊者サナットクマールは闇黒の彼岸を示す。⁽⁹⁾

『チャンドーギヤ』には「清浄」に類する語はあまりなく、√sudh の派生語に関してはこの二つが代表例である。第二例の、suddhi は正確には「清浄であること」という抽象名詞であり、極めて一般的な用法である。大乘仏教も含めて、仏教もこの用法を受け継いでいると考えてよい。第一例の、suddha は所謂宗教的清浄の境地と考えてよいであろう。無論、ヴェーダの宗教と仏教では内容は異質であるが、ウパニシャッドの最古層にすでにこのような用法が見られることは、注目に値する。

ここで少し脇道にそれて、辞書における √sudh の意味を確認しておきたい。モニエル・ウィリアムズによると、√sudh は sudhanti、te という形で「(と)くに自分自身を」清める (purify)、清浄となる、清浄である」、あるいは sudhayati という形で「清められた (to be cleared or cleansed or purified, become pure)」の意であるが、実際にこの形で出てくることは稀である。使役形 sodhayati になると「他を清める」の意で、多く出る。しかしさらに類出するのが、先に例示した過去受動分詞形 'suddha' と抽象名詞形 'suddhi' である。使役の過去分詞形 'sodhita' も多い。そしてこれらに前接辞 pari-, vi-, sam- のついたものを合わせれば、ほぼすべての形が出揃うと言ってよ

いであろう。三つの前接辞の意味については、それら固有の範囲を出ず、とくに注意すべき点はない。スーに關して「とりわけ祭式上の意味において (esp. in ritual sense)」と辞書にはあるが、先の例でもわかる通り、スーのみに当て嵌まるとは限らず、ウパニシャッド、仏教文献では、前接辞による意味の相違はないと考えるべきである。あるとすれば、スーに含まれる「分離、欠如」の意を受けて、vi-sudh に「汚れから」脱する (to be free from) という語感が強くなることくらいであろう。

第一例に戻ると、このような語感が 'suddha' にもあることが窺われる。'suddha' が na lipyate や pūta と一緒に使われているからである。lipyate は līp の受動態であり、この汚れた状態から脱するのが 'suddha' の意味であると思われる。つまり、汚れの欠如態である。また、pūta は kṛp の過去受動分詞であり、やはり「清められた」の意である。kṛp という語は仏教文献ではほとんど見かけず、『梵和大辞典』によれば、pūta という形で『デヴィヤーヴァダーナ』に一例あるだけである。したがって、仏教文献においてどのような文脈で使われるのか、詳しいことは不明であるが、『チャンドーギヤ』と『ブリハッド・アーラニヤカ』に、わかりやすい例が一例ずつある。

前者は四・一六・一である。

およそ祭式たるものは、実に清める (pavate)。それは、およそこの一切のものを清める (punati)。この一切のものを清める (punati) がゆえに、それはまさに祭式なのである。⁽¹⁰⁾

この例によって、kṛp と vi-sudh がともに宗教的な清めの意味を持つことがわかるが、『ブリハッド・アーラニヤカ』三・九・八の次の例は、我々にもっと具体的なイメージを与える。

かの三つの神とはどれであるか。「天・地・空という」これらの三つの界である。なぜならば、これらのすべての神々はそれらの中にあるからである。かの二つの神とはどれか。食物と氣息である。ひとつ半の神はどれか。

およそこの「風という」清める (pavate) ものである。(11)

これによって、「清める」とは「塵を吹き払う」ことであると理解される。これと同義と考えてよい \sqrt{sudh} が來雜物の欠如を意味することは、最古のウパニシャッドからの伝統的用法であると見て間違いない。

『チャンドーギヤ』には、「清浄」を表わす語として、他に \sqrt{suci} の例がある。八・一五・一である。

先生の家でウェーダを学習し、規則通りに師のための儀軌をなし、家に戻った後、清浄な (\sqrt{suci}) 場所で聖典を誦し、……。(12)

\sqrt{suci} は \sqrt{suc} に由来する。 \sqrt{suc} は、「輝く、燃える」が原義のようであり、 \sqrt{soka} のごとく「嘆く」の意でも使われるが、「清める」の意も重要である。形容詞、あるいは名詞としての \sqrt{suci} は、ほとんどの場合広い意味での「清浄」である。辞書にはとくに「儀式上の清浄」という説明もある。ここでの例だけではどのような意味内容であるか何とも言えないが、シャンカラの註によれば、 $\sqrt{vivikta}$ (遠離、空寂) のことであり、人里離れた寂しい場所を指すのであろう。仏教文献にも類出するので、詳しいことはだんだん明らかになっていくことと思う。

二つの文献によれば、およそ以上の通りである。しかし、「清浄」と混同されやすい「光輝」についても簡単に見ておきたい。具体的には、自性清浄心の「清浄」の元来の原語である $\sqrt{prabhāṣvara}$ に類する諸語であり、それらをすべてひっくるめて光明思想と呼んでもよいかもしれない。光明思想はインドに限らず広範囲に見られる。仏教にはこのような傾向はもともと稀薄であったにもかかわらず、後には非常に盛んになっていった。筆者は、その先駆的役割を果たしたのが自性清浄心思想であると考えられる。したがって、漢訳では共に「清浄」と訳されることが多いといえ、 \sqrt{suddha} など、汚れの欠如を意味する語と、 $\sqrt{prabhāṣvara}$ など、光り輝く状態を意味する語とをしっかりと区別する必要がある。『チャンドーギヤ』『プリハッド・アーニヤカ』にも「光輝」の用例があるので、最後にいくつか示しておくことにする。ただし、 $\sqrt{prabhāṣvara}$ ではない。主語はアートマンやブルシャであることが多い。

およそ、汝がアートマンとして崇敬するものは、光り輝き(sutejas)、すべてに遍満しているアートマンである。⁽¹³⁾
 電光の中にいる、かのプルシャなるもの、私はそれこそをブラフマンであると崇敬しています。……。彼は光輝を有します⁽¹⁴⁾(tejasvin)。

「プルシャは」自分の輝き(Bhas)、自分の光明(jyotis)によって眠る。この時このプルシャは、自らを光明とするのである⁽¹⁵⁾(svayam-jyotis)。

神々の世界は燃え輝いている(dipyate)がごとくである。⁽¹⁶⁾

最古の二篇のウパニシャッドは以上の通りである。次に、ウパニシャッドのうち、初期から中期にかけて成立したものについて調べてみたい。決してすべてを綿密に調べたとは言えないが、「光輝」の意味ではない「清浄」に関してのおおよその傾向を知るには十分であると考ええる。整理した上で列挙することにする。

(1) しかし、およそ、知識を有し、思考力を有し、つねに清浄なる⁽¹⁷⁾(suci)人は、かの境地に達し、その後再び生まれることはない。

(2) 水平で、清浄で⁽¹⁸⁾(suci)、砂利や火や砂がなく、音や池が意に快く、目に害とならず、風を避けた洞窟において、彼は集中すべきである。

(3) 彼(アートマン)は遍満した。⁽¹⁹⁾「彼は」輝いており(sukra)、身体はなく、傷はなく、筋はなく、清浄で(suddha)、悪に射抜かれていず、……。

(4) 清浄なところ(suddha)に流れ入った清浄な(suddha)水がそのままの状態であるように、知識ある聖者にとつてのアートマンも同様である。⁽²⁰⁾ガウタマよ。

(5) 知恵が清浄となることによって(jñāna-prasādena)、心身が清浄となる(visuddha-sattva)。心が清浄(visuddha)となるとき、アートマンが明らかとなる。

心身が清浄 (visuddha) となった者が、意によってそれぞれの世界を描き、……。(21)

- (6) ヴェーダーンタの知識に関して決定的な意見を持つ者は、放棄を実践することによって出家者となり、心身が清浄となる (suddha-sattva)。(22)

- (7) 実に、かの、影がなく、身体がなく、血がなく、清浄で (subhra)、不滅なるものを知らしめる人は、……。(23)

- (8) ブルシャは、……、氣息なく、清浄 (subhra) であり、……。

かのブラフマンは、塵埃なく、部分なく、清浄 (subhra) であり、……。

アトマンは身体内部にあって、光輝からなり (jyotimaya)、清浄 (subhra) である。

最高のブラフマンの住処は、そこにおいて、すべての保持されたものが明るく輝く (bhāti subhram)。(24)

- (9) 神々の根源、起源にして、一切の支配者であり、太古にヒラニヤ・ガルバを生んだ、かの大聖者ルドラは、我々を清浄なる (subhra) 知覚と共ならしめよ。(25)

以上の例について若干の私見を述べてみたい。『チャンドーギヤ』のところで言及した(1)の、‘suci’は、この『カータカ』では「宗教的清浄」の意と解釈してよいであろう。一方、(2)の『シュヴェーターシュヴァタラ』の例では「清潔な」くらの意であり、‘suci’は仏教文献での用法と異なるところはない。(3)の『イーシャー』の‘sukra’も同じく‘sue’に由来する。「輝いている」と訳しておいたが、直後に‘suddha’があることから、「きれいな」のほうがいいかもしれない。それよりもその‘suddha’のほうが問題である。アトマンの属性が「清浄」であっても不都合はなく、むしろ中村元氏は「最高の境地を清浄無垢と形容するのはインド古来の習慣である」として、(3)の偈を例としてあげておられる。(26) 最高の境地を清浄と形容することについてはまったく同意見であるが、しかし、清浄の境地に至るのはあくまで人間、修行者の側であり、アトマン、ブラフマン、ブルシャ等の形容に清浄が使われるのは非常に珍しい。

√suddh から派生した語の他の例を(4)―(6)に集めた。(4)の『カータカ』の例は二つとも「清澄な、純粋な」という意味であり、問題はないであろう。アートマンが√suddhaであるということではない。(5)は三つとも『ムンダカ』に出る√visuddhaの例であり、心身 sattuva、心 citta が清浄であるという。これらはすべて、修行者の宗教的清浄の境地を表現しているを見てよい。二つめの例によれば、清浄になるのは心であり、アートマンは明らかとなる(√vibhū)のである。また、一つめにたまたま清浄と訳しうる√prasadaという語も顔を出しているが、知恵(jñāna)と結びついていることから、「信」の意ではなさそうであり、シャンカラによれば「清浄」(svaccha)、「寂靜」(śānta)である。因みにサーンキヤ学派には「清浄なる知恵(√visuddham...jñānam)」という表現がある。⁽²⁷⁾いずれにしろ仏教文献では重要語であり、後にあらためて採り上げることにはしたい。(6)も『ムンダカ』の例であり、√visuddhaと√suddhaの区別はつけられないであろう。√suddhの派生語に関しては(3)のみが特殊例であり、残りはすべて、後に検討する仏教文献での用法と違いはない。

(7)―(9)は√subhに由来する語であり、√subhも「清浄」と訳される。しかし、「美しくする、飾る、輝く」というのが原義であり、今までに見た√suddh、√suc、√puなどとは方向が逆であることに注意しなければならない。すなわち、√suddhなどが、汚れたものを、余分なものを取り除くことであるのに対し、√subhは、飾りなどのきれいなものをつけ加えるということである。√subhraについて、(7)の『ブラシュナ』の例ではあまりはつきりしたことは言えないが、(8)の『ムンダカ』の四つの例を見ると、かなり明らかとなる。アートマン、ブラフマン、プルシャの属性を示し、「光り輝く」を意味する語と併用されているからである。ただしこの語は、仏教文献では稀にしか見ないようであり、本稿で扱った資料では一例も見出せない。『宝性論』にも一例しかなく、その意味は『ムンダカ』と同じである。

大地は、……、瑠璃のように明浄で光り輝いており(√vaidyrya-spaśia-subhra)、離垢の摩尼の属性を持ち、……⁽²⁸⁾

『梵和大辞典』によっても、他に『護国菩薩經』(Rāstrapāla-paripṛcchā)の例があるだけである。

(9)は、『シュヴェーターシュヴァタラ』のもの、*subhā*と同じく *subh* から派生した *subhā* の例である。両者の意味はほとんど同じであろう。しかし、*subhā* は仏教文献に頻出し、他の「清浄」とは違った用いられ方をしているため、後に詳しく論じたい。ここでは知覚 (*buddhi*) を形容していて、正確な意味はわかりにくい、肯定的に使われているため、そのまま仏教文献の用法にはつながらないと考えられる。

以上でウパニシャッドの検討を終える。最高の宗教的境地を「清浄」という語で象徴的に示すことに問題はない。しかもその「清浄」は、*√sūdh*, *√sūc*, *√pū* に関係する語に限られており、汚れなどマイナス価値のものの欠如態を意味している。一方、ブラフマン、アートマンなどの属性を表わす「清浄」は、原義に「光り輝く」という意味を持つものに限られ、『イーシャー』第八が唯一の例外である。「*neti, neti* のアートマン」などといわれ、否定的表現で描写される実体であっても、「清浄」に関してはマイナス価値の欠如態という捉え方はされていない、ということとは興味深い。この二つの系統の言葉が区別されていたことや所謂宗教的清浄に関しては仏教と変わりはないのであるが、最高の価値と認めるアートマン等の実体を「光り輝く」ものであると説明するか否かが、両者の決定的な相違点である、と考えられる。しかしサーンキヤやウパニシャッドのアートマン等の思想の影響を受けて、やがて仏教でも「心は本来光り輝くものである」と言い始め、如来蔵思想が現われ始める頃には「清浄」と「光輝」の区別もなくなってしまったのである。

二、原始仏教文献

次に仏教文献に移りたい。まず、原始経典である。範囲はパーリの五ニカヤとし、先述のごとく『律蔵』にも重

要な語はあるが、今回は含めないことにする。前回⁽²⁹⁾よりも詳しく網羅的に調べることにしたい。原始経典では *śudh* に由来する語が中心であり、*śuc* も多い。しかし、ウパニシャッドでしばしば見られた *śu* や *śubhra* が見られず、逆に *pari-ava-vda* (*vda*) など *vda* に関係する語が目立つ。それでは *śudh* から見ていくことにする。あまりに例が多くてすべてを示すことは不可能であるため、なるべく偏らないように心がけて取捨選択したい。

(1) *śujhati*, *visujhati*, *parisujhati*

誰が清浄となり (*śujhati*)、誰が解脱するのか。

戒を持ち、苦行をなしていても、世にあるバラモンは誰一人清浄にはならず、かの明行足のみ清浄となる (*śujhati*)。自ら悪をなしたならば自ら汚れ (*saukṛīṣati*)、自ら悪をなさなければ自ら清浄となる (*visujhati*)。

比丘たちよ、十法 (正見・正定・正知・正解脱) を具足した人は清浄となる (*visujhati*)。

人は信によって激流を渡り、不放逸によって海を渡り、精進によって苦に打ち勝ち、般若によって清浄となる (*parisujhati*)。⁽³⁰⁾

この三つのうちではやや *parisujhati* の例が少ないが、三つの間にとくに区別があるとは考えられない。他のほとんどの例も人についてであり、たまに、「楊枝を使うと味覚神経が清浄となる」⁽³¹⁾ のように、ものについて使うこともある。三つめの例から判断すると、*saukṛīṣati* が対概念である。

(2) *sodheti*, *visodheti*, *parisodheti*

貪から心を清浄にする (*parisodheti*)。

〔粥は〕膀胱を清浄にする (*sodheti*)⁽³²⁾。

これらは(1)を使役形にしたものである。内容に違いは認められないが、不要物を取り除くという色あいを読み取ることができる。

(3) *suddha, visuddha, parisuddha, samsuddha*

戒を具え、正見にして、漏の尽きた比丘は清浄である (*suddha*)。(取意)

糠なく、穀殻なく、清浄で (*suddha*)、香りが良い米の実。

穢れなく、清浄で (*visuddha*)、生の滅尽を得た彼の人を、人々はブッダと呼ぶ。

清浄なる (*visuddha*) 心を知り、……、一切諸法を知悉したこのような人は、ブッダと言われる。

苦行を受持し、その苦行によって悦意せず思いが満足しなければ、彼はその道理に関して清浄である (*parisuddha*)。

清浄な境地 (*parisuddha-pada*) にあり、汚れない私。

自分の見解によって清浄 (*vivadata*) となり、清浄な (*samsuddha*) 般若を有するもの。⁽³³⁾

これらは(1)の過去分詞形であり、たとえば『増支部』だけでも三十例は下らず、原始経典すべてから、繰り返しも含めて数えれば、数百例はあるであろう。 *sodhita, visodhita* などの使役形の過去分詞を含めれば、さらに増える。

また、

心身の清浄を (*sattassa suddhatam*) 見よ。⁽³⁴⁾

の '*suddhatā*' のような抽象名詞形もあり、'*visuddhatā*' のような中性名詞形もある。⁽³⁵⁾ 先の七つの引用だけでは

決して十分とは言えないが、採り上げた四つの語に意味内容の差が認められないこと、いずれも宗教的清浄の境地を表現し得ること、不必要なものの欠如態を表わしていること、などの点がおわかりいただければ、と考える。人、物、事にかかわらず形容し得ることに關しては、これらの他に、梵行、天眼、一切智性、心、生活、智慧、見解、布施、布、手など被修飾語が実に多岐に亘っており、また、*suddha*、などの過去分詞形一語で「清浄な人」を表わすことも多い。

(4) *suddhi, visuddhi, pārisuddhi, parisuddhi, samsuddhi*

この世にある一類の賢者たちは、これだけが人の最高の清浄(suddhi)である、と語る。

マッカリ・ゴースアラは、現世の沙門果について質問され、輪廻の清浄(samsara-suddhi)である、と答えた。諸衆生の染汚(sankilesa)の因と縁、清浄(visuddhi)の因と縁とは理解が困難である。(取意)

これ(八支聖道)だけが道である。この他に見解の清浄(visuddhi)のために道はない。

世尊は衆生の清浄(visuddhi)のために、戒清浄(sila-parisuddhi)、心清浄、見清浄、解脱清浄のための精勤支を説かれた。(取意)

外の物によって清浄(parisuddhi)を求める人によっては、清浄(suddhi)はない、と智者は語る。⁽³⁶⁾

これらは(1)の抽象名詞形であり、過去分詞ほどではないが、原始經典に頻出する。⁽³⁷⁾(3)の例との意味内容の違いは見

出せない。宗教的清浄の境地という点でもとくに問題はなく、対概念が染汚 sankilesa であることなども既に述べた通りである。ただ、語形の性格の違いか、布や手などの具体的な物について使う例は見当たらない。また、サンスクリットで、parisuddhi、という形はありふれているにもかかわらず、そのパーリ語形である、parisuddhi、は、PTSの辞書にある通り、五つのニカーヤ中、右の一例のみで、普通には、parisuddhi、という形が使われる。あとは接尾辞をつけた

浄者バーラドゥヴァーシヤ(suddhika-bhāradvāja)。

水浄行者(udaka-suddhika)。⁽³⁸⁾

のような形や

一切の煩惱を清める(sodhana)吉祥なる最上の道。⁽³⁹⁾

のような使役の中性名詞形に注意を払えば十分であると考えられる。

最後に、suddhiの意味を理解するための有力な手掛かりとして、珍しい例を二つ示しておきたい。ここでは「掃除

する」の意味であり、マイナス価値の欠如態を表わしている。

かのサーラ樹の幹で、曲がったものを、枯れたものを切り取って、外に捨てて、林の中を清浄にすべきである(anto=vanam suvisodhitam visodheyya)。⁽⁴⁰⁾

汝獵師よ、庭園たる鹿苑を清浄にせよ(sodhehi)。

ただし、ウパニシャッドに一例、アトマンの形容に用いられた'suddha'があったように、原始經典にも捨upekhaの形容に'parisuddha'と'pabhassara'が同時に用いられる文がある。捨が'parisuddha'に形容されること自体には何の問題もないので、'pabhassara'のところで再び採り上げることにはしたい。

以上で、√suddh系の語はウパニシャッドの思想を継承しており、すべて意味内容がほぼ共通していて、悟りの境地を象徴することが多いとはいえない人、物、事全般を形容し、不要物、汚れたものなどマイナス価値を持つものの欠如態を意味する、ということが、おおよそ明らかになったことと思う。

次に、それ以外の「清浄」の検討に移る。まず、√sucに由来するもので、'suci'、'soceyya'、'sukka'がある。⁽⁴¹⁾√sucの意味等については既に簡単に述べたので、早速代表例を挙げることにする。

阿羅漢たちは清浄な状態で(suci-bhūtena)住す。

羞恥心があり、つねに清浄を求め(suci-gavesin)、愛着のない人。

斉平で、白く(sukka)、清浄で(suci)、輝く(sobhana)齒。

身清浄(suci)、語清浄、心清浄、無漏にして、清浄(soceyya)を具足した、清浄なる人(suci)を、悪を洗い清めた(nināta)人という。

非常に清浄清白(su-sukka-sukka)で、微妙で、非常に難解な、かの最高の不死の境地。⁽⁴²⁾

まず'suci'は、この五つの例により、ほぼ√suddh系の語と等しい意味内容であることを示せた、と思う。ただ

し、形容詞と中性名詞との二つの働きを持っており、欠如態というよりはやや積極的な意味であることも多い。*so-cēyya* は中性名詞であり、四つめの例を見ると、*suci* と同内容を表わすと判断してよさそうである。また、ここでは、*kāya-suci*、*vācā-suci*、*ceto-suci* を挙げておいたが、*kāya-soceyya*、*vacī-s.*、*mano-s.* という三組⁽⁴³⁾もあり、なぜかこの二例は決して混同されない。*vācā* と *vacī* の違いはともかくとして、心 *ceto* と意 *mano* が区別なく使われる例でもある。*soceyya* はサンスクリットには対応語がなく、したがってウパニシャッドにも存在しない。*sukka* は、ウパニシャッドのところへ、*suci* に較べるとやや「光り輝く」という面が強そうであると解釈した。しかし、原始経典を見るかぎり、そうとも言えない。第三例のように齒の形容に使う場合や、*kaṇṇha* (Skt. *kṛṣṇa*)、*kala* の対語として白黒(善悪)の「白」に使う場合などがいくつかあるほかは、管見の及ぶ限り、ここに挙げた『テラ・ガーター』の一例と『テリー・ガーター』の一例のみである。⁽⁴⁶⁾あまり見かけない、かなり特殊な語である。

次に、*ṽda* (*ṽda*) に関係する語が多いのも仏教文獻の特徴である。すべて前接辞がついた形であり、具体的には、*o* (Skt. *ava*-), *pariyo*- (*pari-ava*-, or *pari-ā*-), *viva*- (*vy-ava*-), *vo*- (*vy-ava*-) である。使役形がほとんどであり、列举すれば *pariyodapeti*, *pariyodapanā*, *pariyodāta*, *vodāna*, *vivadāta*, *odāta* である。次のような文例が最も多い。

心が定に入って清浄 (*parisuddha*)、清白⁽⁴⁷⁾ (*pariyodāta*) あるとき、……。

この例のように、*parisuddha* や *visuddha* と併用されることが多く、対語として *saṅkilesa* や *saṅkiliṭṭha* が用いられることなどから、意味内容としては *ṽsuddh* とほぼ等しいと考えられる。ただし、*odāta* が赤 *lohita* などと対比される場合もあり、⁽⁴⁹⁾「白」という意味合いが強いのともわかる。また、*pariyodāyati* という、使役形でなく、辞書に載っていない形もある。

皮膚の色は清浄で (pariyodāyati)、顔色は清澄である (vipasīdati)。⁽⁵⁰⁾

このように、とくに顕著な特徴は見出し難い。

次に *√sad* 関係である。これも必ず *pa-* (Skt. pra-), *vippa-* (vi-pa-), *sampa-* (sam-pa-) という前接辞がつく。動詞では *pasīdati*, *sampasīdati*, 使役形になると *pasādeti*, *vippasādeti*, やらぐ過去分詞 *pasanna*, 男性名詞 *pasāda*, 形容詞化した *pāsādika* が主なところである。

如来を随念する彼の心は清浄となる (*pasīdati*)。

ここにいる比丘は、師に対して疑いがあり、疑惑を持ち、信解せず、清浄では (*sampasīdati*) ない。⁽⁵¹⁾

この二例からわかるように「信仰によって心が清浄になる」という意味が強く、*pasāda*, *pasanna* も然りである。前者は *avecāpapasāda* (Skt. *avyeṣya-prasāda*) という合成語形がよく知られているし、後者も *pasanna-citta* として、仏法僧に対する帰依を表現している。⁽⁵²⁾ このような「浄信」の意は、部派仏教、大乘仏教へとそのまま受け継がれていった。ただし、*prasāda* はヒンドゥー教など、インド正統派の思想では仏教とは方向が逆で、神から人間への「恩寵」であるし、仏教でも『ジャータカ』などで「満足、喜び」の意になることもある。*‘vipasanna’* は、

清浄なる (*vipāsana*) 心をもつて、頭をつけて敬礼した。⁽⁵³⁾

のような例もあるとはいえ、*‘accha’* (清澄な)、*‘anavāḍa’* (濁りのない) とともに、池や水の形容に用いられることが多く、⁽⁵⁴⁾ 性格はかなり異なっている。*‘pāsādika’* は、サンスクリット形 *‘prāsādika’* と同様、「見た目がきれいな」という意味合いが強い。⁽⁵⁵⁾ 以上で、「マイナス価値の欠如による清浄」という意味を持つ語は尽きている、と思う。これ以後のものは、同じ「清浄」でも違いがある。

まず *√subh* は、ウパニシャッドのところでは述べたごとく、*√śudh* と方向が逆であり、「プラス価値の付加」を意味する。*‘subhira’* が仏教文献に稀であることも既に述べた。ここで中心となるのは、ウパニシャッドでは意味を明

確にし得なかった *subha* (Skt. *subha*) である。*subha*、といえ、四顛倒「常楽我浄」の「浄」が有名である。しかし、原始経典で「顛倒」(*vipallāsa/viparyāsa*) として説明されるのは一箇所しかないようである。⁽⁵⁶⁾とはいえ「不浄」を「浄」と観することの否定、あるいは、不浄の修習の勧めは至る所で説かれていて、ほとんどが *subha*、と *asubha*、である。つまり、有為法は *asubha*、と観することが正しいのであり、したがって、*subha*、は否定されるべき概念である。⁽⁵⁷⁾しかし、例外もなくはない。次のごとくである。

〔光音天において〕彼らは意所成で、……、浄に住す (*subhathāyini*)。

〔自分が〕抛り所としたところを浄 (*subha*) であると説く者。⁽⁵⁸⁾

動詞 *sobhati* の例は見当たらず、使役形の *sobhetti* は若干例ある。原義は「輝かせる、飾る」である。一例を示しておく。

五法を具足した旧住の比丘は住居を清める (*sobhetti*)。⁽⁵⁹⁾

その他、毘琉璃の形容に用いられることも多いが、いずれにしても *subh* との共通点は少なく、次の *pabhasasara*、とは共通点が多い。*sobhana*、など、他の語には触れる必要はないであろう。また、*sobha*、という形はニカーヤには見当たらない。

最後に、中期大乘仏教に至るまで「自性清浄心」の「清浄」の唯一の原語であった *pabhasasara*、について述べたい。この語についてもかつて論じたことがあるので、⁽⁶¹⁾若干の補足をするにとどめたい。*pabhasasara*、といえ、心性本浄説の起源とされることが多い『増支部』の二例が有名である。⁽⁶²⁾心について単独に用いられるのはこの二例のみで、あとは、「金」「鉄丸」とともに使う例がほとんどである。本稿では、珍しい使い方として、次のものをあげておきたい。

汝は、梵界における、光り輝く (*pabhasasara*) 超越の極を見る。⁽⁶³⁾

さらに先に触れた、金に譬えられている捨 (upekha) の例を示しておきたい。捨も心作用の一つであるが、'pabhas-sara' が 'parisuddha' (清浄)・'pariyodata' (清白) と一緒に用いられている点で、非常に珍しい。

〔金のごとく〕捨は、清浄、清白、柔軟、堪任、光浄 (pabhasara) である。⁽⁶⁴⁾

このように、何百例かのうちには確かに例外もあるが、定型句である「捨念清浄なる第四禪」というときの「清浄」では、『清浄道論』での註釈に至るまで 'pabhasara' が使われることはない。⁽⁶⁵⁾ これらのことから、√suddh 系の語と pabhasara, subha とは、基本的には区別されていると考えるべきであり、√suddh 系の語から心性本浄説のような思想が生まれ発展することは困難であると考えられる。

三、大乘仏教文献

大乘仏教に入る前に、少しだけ部派仏教文献にも言及しておく。まず、パーリ・アビダルマでは、ブッダ・ゴーサの『マノラタ・プーラニー』(増支部註)が「pabhasara とは pañdara であり、parisuddha である」として、三語を同義と見ていることが注目される。⁽⁶⁶⁾ これに従えば、「真っ白な」という性質が強い、ということになり、パーリでは所謂「無覆無記」の状態を「清浄」ということが多い。

一方北伝アビダルマでは、サンスクリット原典のある『俱舍論』による限り、とくに注目すべき点はまだ確認できていない。'prabhāvara' は使用されず、√suddh 系の用法にも際立った特徴はない。目につくのは、vi-, pari- という前接辞のついた例が減り、ニカーヤではあまり見られなかった形容詞形 'suddhaka' が増えていることくらいである。ただ、信 'śraddhā' が 'cetasā prasadāḥ' (心の澄浄) と定義されていることは重要で、これが当時、'prasāda' についての仏教での一般的理解となっていた。『清浄道論』に「信は、信憑を相とし、あるいは信頼を相と

し、澄浄を本質とする (paśādana-rasa)⁽⁶⁸⁾とあり、『ミリンダ王の問い』にも「信は、澄浄を相とし (sampaśādana-lakṣaṇa)、躍入を相とする」⁽⁶⁹⁾とある。『成実論』の「心が清浄を得る、是れを名づけて信と為す」⁽⁷⁰⁾の「清浄」もおそらく、'prasāda' に近い形であろう。すでに見た通り、「信」を「心澄浄」であることみなすことは原始經典以来であるが、'ceto-pasāda' を 'ceto-padosa' (心の欠点、邪惡) の対語とする例もある。⁽⁷¹⁾部派についてはこのくらいにして、大乘仏教文献へと移りたい。

まず、『八千頌般若経』である。⁽⁷²⁾√sūdh 系の語に関して、空 sūnya、遠離 vīvikta などと同義であると見做してよい、というのがこれまでと異なる点である。しかし、これは「マイナス価値の欠如態」から容易に導き出される性格であり、'pabhasara' からは直接導かれ得ない。subha と asubha, vyavādāna と samkleśa が対立的であるのに対し、それを超えたところを √sūdh 系で表現している。後に、施者、施物、受者の三者が空であることを三輪清浄と称するのも、これに由来するのであろう。また、それ以外でも、原始經典の用法を忠実に受け継いでいる点が多いと見てよい。śukla, prasāda⁽⁷³⁾なども従来通りであるが、caukṣa (from √suc) という語が、'suci' の類義語として登場してくる。⁽⁷⁴⁾

一方、'prabhāvara' がもと々 √sūdh 系の語と厳密に区別されていたことも以前に述べた通りであり、√sūdh と混同された 'prabhāvara' が「空」の意味として『八千頌』に紛れ込んだものが、『般若経』の心性本浄説であると誤解されてきた、と考える。そして、中期大乘仏教に至って両者が同義語となっていたのである。ただ、筆者が以前に、'prabhāvara' は心 citta 以外については使わない、と言ったことは訂正しておきたい。

この甚深なる、光り輝く (prabhāvara) 般若波羅蜜という寶石。⁽⁷⁵⁾

のように、寶石を形容している例が存在するが、むしろ、結果的に原始經典の用法を受け継いでいることを示す根拠の一つになり得る。しかしながら、『ガンダウィユーハ』では菩提心について使われている例もあり、⁽⁷⁶⁾大乘仏教では、

菩提心そのものにおける用法も検討する必要がある。

『般若経』の一員である『金剛般若経』には、漢訳には「清浄」の語があるにもかかわらず、サンスクリット原典には文字通りの「清浄」は出てこないようである。しかし、広義の般若経典類の一つである『維摩経』には頻出するため、簡単に見ておきたい。『八千頌』にもある「仏国土の清浄」という句が冒頭部を中心によく見られる。⁽⁷⁷⁾チベット訳で 'sats rgyas kyi shin yois su dag pa' であることが多く、'buddha-kṣetra-parisuddhi' に還元し得る。「清浄」の他の形の存在も予想され、「本性清浄」も何回か見られるが、『八千頌』からはずれた用法はなく、意味に関して問題はないと思われる。この「本性清浄」の「清浄」は *śuddh* 系のみであり、しかも心について用いられることはない。したがって、心性本浄説らしきものさえ勿論見当たらない。清浄と染汚の対立をいうときには、「清浄」に 'nam par byā ba' (vyavadāna) を用いており、⁽⁷⁸⁾『八千頌』を受け継いでいると思われる。

さらに『維摩経』で「清浄」といえば、染浄和合説を説いたものと考えられる『相応部』の「心が雑染となるから衆生は雑染となり、心が清浄となる(citta-vodāna)から衆生は清浄となる(visujjhaṇṭi)」という一文を引用していることがよく知られている。⁽⁷⁹⁾その際、当然といえばそれまでであるが、'vodāna' が 'nam par byā ba', 'visujjhaṇṭi' が 'nam par dag par hgyur ro' と訳されていることから、『維摩経』原典がパーリ文を忠実に引用していることがわかる。『維摩経』においても「清浄」の混乱はなかったと見るべきであろう。

最後に「自性清浄心」を始め「清浄」に関係の深い如来藏系経典から、初期のものについて調べたい。

『如来藏経』では光明思想が顕著となる。しかし、'hod zer' (rasmi, 光明) を放つ、などの表現が多いだけで、心性本浄説が存在するか否かさえ微妙であり、'hod gsal ba' (prabhāsvara) の語も出ないようである。唯一の心性本浄説らしき表現というのは「本性を浄めるために (raṇ bshin sbyaṇ phyir) ⁽⁸⁰⁾」であり、'raṇ bshin' (prakti) が自性清浄心のことであろう、といわれる。*śuddh* 系の語についても、この例に見られるごとく、「浄化する」という使

役形で使われることが非常に多い。このことの背景には、「現在の汚れた状態から不純物を取り去って本来の美しい状態を回復する」という如来蔵思想の基本的な考えがある。‘sbyaṅ’以外にも、‘rnam par sbyaṅ ba’、‘yodis su sbyaṅ ba’などの語が多く、これらは、(vi, pari-)‘sodhayati’などと還元し得るであろうし、また、vyavadāpayati, parikarman, parijaya などが使われている可能性もある。(pari-, vi-)‘suddha’などの語の従来通りの用法も認められるため、「清浄」の内容に変化が生じているとは考えられないが、白紙のごとき状態に戻すというよりは、光り輝く状態を願わすという傾向が強い。

『不増不减経』には漢訳しか残されていないため、「自性清浄心」を明確に説いているにもかかわらず、はっきりしたことは言えない。「自性清浄心」の部分は欠けているとはいえ、『宝性論』に引用されているサンスクリット文断片が整理されているので、この経にも触れておきたい。まず「法身」を形容する「清浄」に‘suddha’が、「法性」の形容に、parisuddha⁽⁸¹⁾ が用いられていることは、『八千頌』で「空」の意に用いられている場合と明らかに異なり、また、如来蔵の徳性としての‘dharma’の形容に‘subha’⁽⁸²⁾ が用いられていることも、それ以前には見られなかった。これらのことから判断すると、『不増不减経』の「清浄」の使用法は乱れを見せ始めている。ただ、「自性清浄心」の「清浄」の原語については、現段階では何とも言えない。『勝鬘経』とは違って、「客塵煩惱染」を含む典型的な心性本浄説が見られることから、本来唯一の原語であった‘prahāṣvara’⁽⁸³⁾ が用いられている可能性も捨て難い。その一方で、前述のごとく「清浄」の原語が混乱し始めていることと、漢訳の際の操作でどうにでもなるとはいえ、それ以前には見られなかった「自性清浄心」という合成語が新たに成立していたかもしれないことから、√suda 系の語が採用された可能性もあるためである。

『勝鬘経』は自性清浄心を肯定していると筆者は考えている。⁽⁸⁴⁾ しかし、それはともかくとして、チベット訳や『宝性論』が引用するサンスクリット文を見ると、それ以前と「清浄」の用法が明らかに違っている。⁽⁸⁵⁾ 本経には典型的な

心性本浄説は見出せないが、「自性清浄心が随染される意味」⁽⁸⁶⁾、「如来蔵は本性として清浄であり、客なる煩惱によって汚されている」⁽⁸⁷⁾などの「清浄」はことごとく 'yois su dag pa' (parisuddha) であり、'hod gsal ba' (prabhāvara) は一例もない。また、『不増不減経』では不確定だった自性清浄心の合成語形 'prakṛti-parisuddha-citta' が見出せる⁽⁸⁸⁾。このことは 'prakṛti' の独立使用とともに、自性清浄心思想の大きな進展であり、本経の成立がもし『楞伽経』より古ければ、最初の例であろう。その他、「浄化する」という使役形が多いことや、一般的な形容詞としては 'suddha', 'visuddha' が使われることは『如来蔵経』の場合と同様である。

ウパニシャッドと原始仏教との間には「清浄」の意味にとくに違いは見られず、「清潔、清澄」と「光輝」とは意味上区別されていた。前者の「清浄」が最高の宗教的境地を意味するとはいっても、基本的に人間に対して用いられるのであって、絶対者に対してではない。それは、合わせて、人間に関係する物・事にも幅広く使われていた。一方後者の「清浄」すなわち「光輝」は、ウパニシャッドではブラフマン、アートマンなど最高實在に対して用いられたが、原始仏教では勿論このような用法はない。これは両思想の本質的相違に関わる重要点であると考ええる。

大乘仏教になると、部派時代に主張され始めた心性本浄説の影響が現われ始める。『八千頌』や『維摩経』では、原義から容易に導き出し得る「空」としての「清浄」が多用されたが、この時点では「光輝」との区別は保たれている。「光輝」が自性清浄心にふさわしい語であるのに対し、「清浄」は空の意味にふさわしいからであろう。しかし、心性本浄説そのものが説かれているのではないといえ、その影響によって、「清浄」と「光輝」の混乱の兆しが見え始めたことも確かである。ただし筆者はこの部分について、後世の増広であって、従来の説とは反対に如来蔵系経典の影響を受けたものと考ええる。

心性本浄説を積極的に主張する如来蔵系経典では、「両者の混同は甚だしい。」「自性清浄心」の「清浄」に、もと

もとは唯一の原語であった 'prabhāṣvara' (光輝) に替えて、'parisuddha' を用い始めたばかりではなく、この 'parisuddha' を「空」の意味としてではなく、法身等の最高実在の形容として用い始めるのである。これは、ウパニシャッドで最高実在の形容には「光輝」(tejas, jyotis, etc.) が使われ、'suddha' などは例外的にしか使われなかった、という用法を超越している。思想的に見て、自性清浄心・如来藏思想は、ウパニシャッド、サーンキヤ等のインド正統派思想と仏教との融合であると考えられるが、「清浄」の用法から見ても同じことを言い得る。

- (1) 『仏教学』第一四号、一九八二年、九五—一〇一頁。
- (2) *peśala* (Pāli *pesala*) は、比丘、梵行などの形容に使用われ、「愛すべき、温雅な」というような意味である。*pāpa* の対語に使われる例もあり、原始経典では心についての用例は見当たらないが、大乘仏教では *peśala-citta* の例がある(『瑜伽論』『菩薩地』)。
- (3) *kalpa, kalpika* (Pāli *kappa, kappiya*, etc.) などは、『律蔵』で、「適する、許可された」という意味で、たとえば「淨衣、淨食」のように使われる。詳しくは、平川彰「律蔵の成立と淨法の関係」(『宮本博士還暦記念印度学仏教学論集』所収、一九五四年、一三一—一四四頁)などを参照。
- (4) モニエル＝ウィリアムズの梵英辞典によれば、*accha* は *achad* の否定形である。
- (5) *sīta* (Pāli *sīta, sītala*, etc.) は、語根 *√śya* に由来し、「清浄、清涼」とは訳されるが、直接「清浄」という意味はない。しかし、原始経典では、涅槃の境地の形容に *śūti-bhūta* という形で頻出するため、同じく涅槃を意味すると考えられる *suddhi* との関連についての手がかりとなる重要な語である。
- (6) *vimala* の *mala* は、モニエル＝ウィリアムズには 'prob. fr. *√mlai*' とあり、『梵和大辞典』では *√mla* という形を採用している。如来藏思想では *amala* とも頻出するが、自性清浄心の歴史から見れば、それほど重要であるとは言えない。
- (7) 辻直四郎「ウパニシャッド」(『世界文学大系四』『インド集』所収、筑摩書房、一九五九年)、六五頁。岩本裕「ウパニシャッド」(『世界古典文学全集三』ヴェーダ・アヴェスター』所収、筑摩書房、一九六七年)、四〇—四一五頁。中村元『インド思想史』、岩波全書、一九六八年、二二—二四頁。長尾雅人・服部正明「インド思想の源流」(『世界の名著一』バラモン教典 原始仏典』所収、中央公論社、一九七九年)、一九頁、など。
- (8) *Ten Principal Upanishads with Sankara-bhāṣya*,

Delhi, 1964, p. 492, ll. 21-22.

- (6) *ibid.* p. 565, ll. 4-6. なぞ 本文には *sasvasāddhan* とあるが、シヤンカラ註に従って *sattva-suddhan* に訂正する。さらに *sattva* について中村元氏は「ウパニシヤットのこの思想を受けて仏典の最古層では「人間の本质」あるいは「心身」の意味に用いられる（バーリ語では *satta*）と言われる（『原始仏教の思想』上、中村元選集第二三巻、春秋社、一九七〇年、七三頁註(8)）。そうであれば、この場合も、宗教的清浄の境地と考えてよいであろう。」

- (10) *ibid.* p. 462, ll. 25-26.
 (11) *ibid.* p. 835, ll. 17-19.
 (12) *ibid.* p. 604, ll. 20-21.
 (13) *ibid.* p. 495, ll. 23-24. 『チャーンドーギヤ』五・一二・一。五・一八・二等も参照。
 (14) *ibid.* p. 718, ll. 18-20. 『プリハッド・アラーニヤカ』二・一・四。二・一・九等も参照。
 (15) *ibid.* p. 877, ll. 9-10. 同右、四・三・九。 *svayam-ityots* については、註(7)の『世界の名著』一、九一頁、註(5)を参照。
 (16) *ibid.* p. 788, l. 26. 同右、三・一・八。
 (17) *ibid.* p. 81, ll. 5-6. 『カータカ (カタ)』三・八。
 (18) 『シェウエーターシェウアタラ』二・一〇。このテキストに関してのみ、ハウシルト本 (Richard Hauschild,

ed. & tr. "Die Svetāśvatara-upanīśad. Eine Kritische Ausgabe, mit einer Übersetzung und einer Übersicht über ihre Lehren", Leipzig, 1927) を用いる。同書一二頁。

- (19) *Ten Principal Upaniśads*, p. 7, ll. 8-9. 『イーシャー』第八。
 (20) *ibid.* p. 90, ll. 18-19. 『カータカ』四・一五。
 (21) *ibid.* p. 169, ll. 9, 23. p. 170, l. 5. 『ムンダカ』三・二・八、九・一〇。 *visuddha* が三偈連続で登場したので、まとめて部分訳を試みた。
 (22) *ibid.* p. 172, l. 20. 『ムンダカ』三・二・六。
 (23) *ibid.* p. 127, ll. 17-18. 『ハルシナ』四・一〇。
 (24) *ibid.* p. 154, ll. 15-16; p. 163, ll. 10-11; p. 167, ll. 22-23; p. 170, l. 17. 『ムンダカ』二・一・二、二・二・九、三・一・五、三・二・一。 *śubhra* について、まとめて部分訳を試みた。
 (25) 『シェウエーターシェウアタラ』三・四。ハウシルト本、一六頁。偈末の「清浄知覚」の部分は、同一の形で、四・一・一二にも出てくる。他にも『ムンダカ』二・一・六の *śubra* など、いくつか目に触れたが、引用が長くなりすぎるため、主要例としてはこれで十分であろうと判断してやめておく。
 (26) 中村元・紀野一義訳註『般若心経・金剛般若経』、岩波文庫、一九六〇年、二二頁。

- (27) *Sāṃkhyakārikā*, v. 64.
- (28) *Ratnagotravibhāga*, ed. by E. H. Johnston, p. 101, ll. 11-12.
- (29) 註(一)の拙稿、参照。
- (30) 出典は順番で、Sn. 508; SN. I, p. 166, l. 3; Dhṛp. 165; AN. V, p. 248, l. 23; Sn. 184 である。最後の例は *Udāna* 10-5, SN. I, p. 214, ll. 27-28 等とも同じ文である。
- (31) AN. III, p. 250, ll. 26-27.
- (32) 一は 24th DN. I, p. 71, l. 22; MN. III, p. 3, ll. 28-29, 24th 一は 24th AN. III, p. 250, l. 14.
- (33) 出典は AN. I, p. 241, ll. 25-29; DN. III, p. 199, ll. 33-34; Sn. 517; MN. II, p. 144, ll. 20-22; DN. III, p. 45, l. 30-p. 46, l. 2; Therī-G. 368; Sn. 881 である。
- (34) Sn. 435, 76th 「心身 satta の清浄性 *suddhata*」というのは、本稿でも引用した『ウパニシヤナ』(『チャーン・ニキヤ』七・二六・二『ムンタカ』三・二一・八)の思想を受け継いでいると言われる(中村元訳『ハダダのことば』岩波文庫 一九五八年 一一九頁 註四三五)。
- (35) AN. IV, p. 239, l. 19. PTS の註書には『増支論』第三巻にあるが、第四巻の誤りである。 *suddhatta* ないし *DN. II*, p. 14, l. 30 である。
- (36) 出典は Sn. 875; DN. I, p. 54, ll. 22-24; DN. III, p. 274, ll. 7-10; Dhṛp. 274; AN. II, p. 194, l. 34-p. 195, l. 7; SN. I, p. 169, ll. 18-19 である。 *samsuddhi* は Sn. 788 の一例しか見出せなかった。なお、『南伝大藏經』の註には、第二例の *suddhi* は「浄化」苦の終滅」という意味である第六巻 一二九頁 註(6)。
- (37) 宇井伯寿『印度哲学研究第四』(初版は、甲子社書房 一九二七年)によれば、マニエーカ王の「摩崖法勅」には *bhava-suddhi*, *bhava-suddhi* (宇井訳では「清浄」)という形がある(二二四頁)。² また、七清浄の中の「心清浄」(*citta-visuddhi*)は「定清浄」のことである(水野弘元『ベーリ仏教を中心とした仏教の心識論』ミタカ 一九六四年 四二頁)。
- (38) 出典は SN. I, p. 165, l. 32; *ibid.* p. 182, l. 29 である。他に SN. III, p. 149, l. 5; V, p. 193, ll. 3-4 など 表題に多々 *suddhaka* という形がある。 SN. V, p. 173, l. 25 などのように、表題に多々。
- (39) *Thera-G.* 520. 他に 521, 1115 を参照。
- (40) MN. I, p. 124, ll. 32-33; *ibid.* p. 66, ll. 10-11.
- (41) 本稿、六九頁。
- (42) 出典は AN. I, p. 211, l. 11(他に多々); Dhṛp. 245 (他に多々); DN. III, p. 178, l. 14; AN. I, p. 273, ll. 15-16; *Thera-G.* 212 である。
- (43) AN. I, p. 271, l. 24, etc.

- (44) DN. II, p. 18, l. 23.
- (45) SN. V, p. 66, l. 5, etc.
- (46) Theri-G. 56. スッカー (Sukka) 尼の名前の由来の説
明に際して、徳 (dhamma) を形容してゐる。
- (47) AN. I, p. 164, l. 3, etc.
- (48) MN. I, p. 70, ll. 16-17; *ibid.* p. 318, ll. 5-21.
- (49) DN. I, p. 173, l. 33.
- (50) MN. I, p. 250, ll. 24-25, 32-33. この例に於て、*pari-yodayati* を *vippasidati* と似た意味であることがわかる。他は *pasidati* を *pariyodapana* と並べて用いられてゐるものもある (AN. I, p. 207 ff.)。両者は関係が深いことを窺わせる。vsad に代つては、すぐ後に検討することゝする。
- (51) 一つめは、前註(50)と同じところから引用した (ll. 8-9)。二つめは、DN. III, p. 237, l. 24 - p. 238, l. 1 なるものである。
- (52) AN. IV, p. 395, ll. 5-6, etc.
- (53) Thera-G. 427. cf. Dh. 79.
- (54) AN. I, p. 9, ll. 17-18, etc. など *accha* を「清澄な」の意で、こゝには使はざる。
- (55) MN. I, p. 167, l. 1, Thera-G. 432, 927, etc. DN. III, p. 141, ll. 18-23 には、法註 *dhamma-pariyāya* を形容してあり、また *Samantapāsādikā* (『善見律毘婆沙』) のような例もある。全体として vsad は由来たる語で「欠如態」という側面は弱くと言ふ得る。
- (56) AN. II, p. 52, ll. 7-16.
- (57) 註(一)の拙稿、九八頁、参照。なお、そこでは「浄解脱」に言及したが、『瑜伽論』『声聞地』にも *śubha-vimoksa* がある (シニクラ本、一九一頁、二〇行)。
- (58) DN. I, p. 17, ll. 21-22, etc.; Sn. 910. 他にも「浄なり」と勝解するところをかなりいくつ例もある (AN. IV, p. 349, l. 12)。
- (59) AN. III, p. 262, ll. 28-29. Sn. 421 には、「軍隊を整える」の「整える」(中村元訳『パッタのことば』、岩波文庫、七三頁)に相当する例もある。
- (60) DN. I, p. 76, l. 21, etc.
- (61) 註(一)の拙稿、九五頁以下、及び拙稿「パーリ『増支部』の心性本浄説について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要・別冊第八集』所収、一九八一年)、一六一―一七頁、参照。
- (62) AN. I, p. 10, ll. 5-18.
- (63) SN. I, p. 145, l. 24. 原文は *“passasi vitivattantam”* *brahmaloke pabbassaran-ti*」であり、筆者は意味が十分に理解できない。『南伝大蔵経』の訳文を引用して置く。「友よ、汝は今日も猶前に抱きし見を持つや。梵界の光に勝る光を見るや」と(『第二三巻 相应部 經典一』二四九頁)。
- (64) MN. III, p. 243, ll. 11-12, ff.
- (65) Visuddhimagga (PTS), p. 167, ll. 33-34. この例は

『分別論』を引用しているが、「清浄」の意味は *visada*, *parisuddha*, *pariyodāta* である。

- (66) このことについては、拙稿「有分心と自性清浄心」『東洋の思想と宗教』第五号、一九八八年、六五一—六八頁。なお、原文は *Manorathapūraṇī*, I, p. 60.
- (67) *Abhidharmakośabhāṣyam*, ed. by P. Pradhan (repr.), p. 55, l. 6.
- (68) *Visuddhimagga*, p. 464, l. 20.
- (69) *Mūlindapañho* (PTS), p. 34, ll. 27-28.
- (70) 大正三二、二八八上。
- (71) *AN. I*, p. 8, l. 25; p. 9, l. 4.
- (72) 拙稿『八千頌般若経』第一章の心性本浄説（『印仏研』三七—、一九八八年、三四—三五頁）、同『八千頌般若経』の心性本浄説について（『フィロソフィア』第七六号、一九八九年、一四一—一四三頁）、を参照。
- (73) *prasādayati* が「信」とは関係なく「汚水を浄化する」という意味で使われている例があることも、原始経典と同様である（*Aśṭaśasrikā Prajñāpāramitā*, ed. by P. L. Vaidya, 1960, p. 49, l. 29）。
- (74) *ibid.* p. 45, ll. 11-12, cf. l. 24.
- (75) *ibid.* p. 118, ll. 21-22. それほど重要なことではないが、筆者の誤りの元である、高崎直道氏の見落としも訂正せねばならない（『如来蔵思想の形成』春秋社、一九七四年、四〇一頁）。
- (76) 藤堂俊英「光明思想と如来蔵思想」（『仏教論叢』第一八号、一九七四年、一六四頁）を参照。
- (77) 『維摩経』にはサンスクリット原典が存在しないため、大鹿実秋氏校訂のチベット訳による（チベット文維摩経テキスト）、『インド古典研究』所収、成田山新勝寺、一九七〇年、一三七—二四〇頁。p. 150, l. 16 ff.
- (78) *ibid.* p. 218, ll. 4-5.
- (79) *SN. III*, p. 151, ll. 22-23. 『維摩経』の引用部分は、p. 166, ll. 27-28. なお『俱舍論』にも似た引用がある。
“*yathā saṃkṣīyate cittaṃ yathā cittaṃ visudhyati*” (AKBh, ed. by Pradhan (repr.), p. 466, l. 7)。
- (80) 『影印北京版西藏大蔵経』第三六巻、242b⁵.
- (81) 宇井伯寿『宝性論研究』、岩波書店、一九五九年、三一—九—三二六頁。高崎直道「不増不減経の如来蔵説」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第二三号所収、一九六五年、一〇五—一〇七頁）。
- (82) 大正一六、四六七中、二二—二三行。『宝性論』の引用文は、ジョンストン本、四一頁、一三行。
- (83) 大正二六、四六七中、二三行。『宝性論』、五九頁、一三行。
- (84) 松本史朗氏は『勝鬘経』の一乗思想について（松本『縁起と空』所収、大蔵出版、一九八九年（ただし初出は一九八三年）、二九—三三四頁）で、『勝鬘経』は自性清浄心を認めていない、と言われる。それに対し、筆

者は「自性清浄心をめぐって」(平川彰編『如来蔵と大乘起信論』所収、春秋社、一九九〇年、二七三—二七五頁)において、自性清浄心を認めている、という立場を示した。

- (85) 高崎直道「唯心と如来蔵」(平川彰編『仏教と心の問題』所収、山喜房、一九七九年、六八頁)を参照。

- (86) 『影印北京版西蔵大蔵経』第二四卷、261a⁴、『宝性論』の引用文は、一五頁、六行 (prakti-parisuddhasya cittasyopakleśarthah)。

- (87) 同右、260e⁸。

- (88) 同右、261a⁸ に *sems ran bshin gyis yons su dag pa* とある部分が、『宝性論』の引用によって *prakti-parisussha-citta* という合成語であることがわかり (ジーン・ストン本、二二頁、一行)、262b¹ の *ran bshin gyis yons su dag pa'i sems* という例も、間違いなく合成語であろう。